

透析室を考える

澤田重樹

先だって、ある事務機器メーカー役員の「ニューオフィス」についての講演を聞く機会があった。話を要約すると、オフィスは今や知的生産の場であり、情報化の中核の場であって、単なる事務処理の場ではない、したがって、快適かつ機能的なオフィスの環境の創造が企業の発展には不可欠である、というものであった。

「ニューオフィス」はハイタッチの時代

こうした考えが潮流となっている背景には、勤労者の大半は人間として活動する大部分の時間を職場で過ごしている、ということがある。たしかに、24時間を区切って考えてみると、このことを理解するのは容易なことである。

かつて、オフィス部門は間接部門として位置づけられ、久しく“必要悪”とされてきた。ひたすら生産、しかも大量生産が至上命令であった高度成長期のわが国の企業においては、しかし、このことは一般的に容認されていたことである。それ故にオフィスは狭いほど良いとされていた時代はさほど昔日のことではない。ところが、現在のように情報が氾濫する時代にあっては、いかに情報を管理していくかが企業の運命さえも決するようになった。

こうした変化に対応して、オフィスの機能を根本から考え直す企業が急増しているという話を耳にする。例えば、日本IBMやソニーなど先端企業のオフィスにおいては机の配置を工夫するのではなく、採光、音量、音質、色彩、エアコ

ンなどにも配慮して、いわゆる「ハイタッチ」感覚の環境作りを進めているとも言われている。このことは、ひところ「OA革命」と言われた「ハイテクオフィス」から一歩進んで、「ニューオフィス」へと変貌しつつあることを物語る。

透析室は知的生産の場であってもよい

翻って考えてみた場合、このようなトレンドは実は透析室という特殊な医療の現場においてもあてはまる点がある。つまり、透析室は治療の場であると同時に患者が何かを生み出すための場、すなわち知的生産の場でもあると考えるのはあまりにも突飛な考えかたであろうか。実際にアンケートをとったわけではないので手前みその発想なのかもしれないが、仮にそういう発想が主流になるとすれば、透析室という空間をいかに演出するかは大変意義のあるテーマである。何せ、4～5時間にも及ぶ透析時間は考えようによっては時間の「浪費」でもある。にもかかわらず、透析患者にとっては、それはまた強制された生活習慣の一部とならざるを得ない厳しい現実がある。故に、その時間をただひたすら治療の時間としておくにはいかにももったいない。だが、整然とベッドがならび掃除がいかに行き届いた透析室であっても、無造作にテレビだけを配しただけの透析室であったり、BGMが流れるだけの透析室では治療室の域を越えることはできない。

従来から、環境とストレスの関係については

医学的にも俗学的に言及を見ている。米国のある臨床報告によると、窓から緑の森が眺望できる部屋の入院患者と絵画だけしか眺めることができなかった部屋の入院患者の病状回復には明らかに差があったということである。このことは環境が人間の精神活動に何らかの影響を与え、二次的にそれが生理的機能にまで波及することを実証した報告例として興味深いが、難しく考えなくても、無機質的な“物質”だけの部屋ではストレスが増幅することは当たり前のことである。この点当院は幸い(?)にも背後に岐阜城を擁する金華山の稜線を眺望できる特権を持っているので心配は無用であるが、いずれにしても自然環境がストレスなどとも大いに関係することは間違いない。

病院は一般企業以上に「ハイタッチ」を生かすべきである

ところで、快適な環境で透析ができるようにいろいろな工夫はされていると思う。しかし、「より自然な感覚」を取り入れた透析室にはなっていないであろう。実は、「ハイタッチ」とはこの「より自然な感覚」のことを言うのであるが、この「ハイタッチ」という言葉は高度技術化の進展に伴って出現した言葉でもある。すなわち「ハイテク」に対応するのが「ハイタッチ」である。ところで、ハイテクのイメージは人間性とは対峙する。例えば「ハイテクカラー」は一種の審美眼によって選択され、徹底的に洗練された色彩だと言えるが、この色の家具は木目などの自然な造形や色を生かした家具に比べ、自然を感じることは少ないだろう。

本来、人間は自然の中に安らぎを求める動物である。傷心を癒すために旅に出たり、気分転換のために散策したりするのもこのためであろう。自然に触れ、自然が示す現象や美に感動し、そこに“生”の躍動を感じる人は多い。「ハイタ

ッチ」は人間が持つこの特有の感覚を喚起し、安らぎと同時に創造活動、知的生産活動ができる環境を再現するものである。

医療法において、「病院は、傷病者が、科学的で且つ適正な診療を受けることができる便宜を与える……」とあり、治療が最優先することはいささかの疑問もない。ところが、ホスピスにおいては人間として「尊厳ある死」あるいは「豊かな死」を迎えることが優先する。また脳死の問題にしても科学的医療が万能ではないことを示すものである。こうした医療概念そのものの変化に伴って医療の現場においては、既に「ハイタッチ」はかなり積極的に推進されてきている。例えば、待合室にアトリウム(中庭)を設けたり、吹き抜けにするなどホテルなみの大胆な空間デザインをしている病院も少なくない。オフィスに先駆けて、病院にはすでに「ハイタッチ」が生かされているのである。

自然と接することで人間は安らぎを覚えるということからすると、病院に「ハイタッチ」を生かすのは当たり前のことであり、もっと推進されるべきである。

透析室も「ハイタッチ」の時代

透析室に「ハイタッチ」を取り入れると言っても、いざ実際となるといろいろ難しい。それは、人工腎臓という器械の存在なしには透析は考えられないからである。このことを無視するわけにはいかないが、少なくとも「ハイテク」に「ハイタッチ」を対応させた透析室作りを急がねばならない時代になっている。